

# 日本経済思想史研究

## —— 柳田国男と私 ——

藤井隆至

### 1. はじめに

大学時代を経済学部で学んだ私は、大学院経済学研究科で研究生活をはじめ、今は経済学部に勤務して経済学の一科目を担当している。その意味で私は、三分の一世紀を経済学の中で過ごしてきた。しかしそれにもかかわらず、既存の経済学には今も昔もつよい不満を持っている。その不満は、私を「柳田国男」の研究に向かわせた。「柳田国男」というのは、もちろん、民俗学者として著名なあの柳田国男である。

他の大思想家のばあいも同様だと思うが、柳田国男を研究するばあいにも、多くの困難がともなっている。

研究面に限定すれば、柳田国男という人は、いろいろな学問分野で第一級の研究成果を残した。民俗学はもちろん、経済学、歴史学、教育学、文学、言語学、社会学、宗教学、人類学、等々である。柳田の思想の本質部分・中核部分に肉薄しようとすれば、そうした多くの学問分野についても、ひととおりの基礎知識はもっていなければならない。これが第一の困難となる。

第2に、研究する自分自身が研究テーマを明確に持っていなければならない。研究対象が巨大であればあるほど、研究者はその巨大さに圧倒され、受け売りするだけの“論文”しか書けなくなる恐れがある。研究する側にも、強い堅固な主体性が要求される。

自分のこれまでの学問営為を客観的に語る能力は私にはないけれども、私の学問を語る場が提供されたのを利用して、青年時代に経済学の閉塞状況に反発を抱いた私が、柳田国男とどのように向かいあってきたのかを簡単に整理し、なぜ柳田国男でなければならなかったのか、どのようにして柳田に挑戦したのかを、メモ書きしておきたい。そのことはまた、学問の世界を志した私自身が自分の初心を確認する作業にもなると思う。

---

#### (注)

\* 本稿は、横浜市立大学大学院経済学研究科博士課程で2001年11月22日におこなった講演「私の日本経済思想史研究—柳田国男をめぐる—」の原稿をもとにしている。

## 2. 大学時代——教養学部

私は1949年に生まれた。小学校に入学したのが1955年、大学に入学したのが1967年だったから、戦後復興期から高度成長期が終わるまでの急激な右肩上がりの時代に、少年期や青年期を生きたことになる。それは、「明日は今日より良い」と期待できた時代、「努力はいつかは報われる」時代だった。

入学した大学は東京大学教養学部文科Ⅱ類、3年生になると経済学部に進学するはずのコース（科類）である。数学が得意だったこともあって、卒業後は経済官庁に就職したいと考えていた。所得倍増計画で知られる池田勇人が首相だったのは私が中高生だった1960年代前半だったし、高度成長期の官僚は、非常に高い評価を受けていた。時代は経済の時代であり、官庁エコノミストが注目を集めていた。

ただし、大学入学後の私は、経済学だけを勉強することはしなかった。このことは、私が入学したのは「教養学部」であって、経済学部でなかったことと関係している。教養学部がかつての旧制高校だったこととも関係しているのであろう、授業などの折に、専門学部ではなくて教養学部であることの意義をしばしば先生方から聞かされた。私は「教養」を摂取することに務め、人文科学にせよ、社会科学にせよ、けっこう熱心に授業を聞いていた。

以下は私にとって刺激的だった科目。

まず第二外国語。第二外国語はフランス語で、クラス担任は小林善彦先生だった。このころ中央公論社から『世界の名著』が刊行中で、先生はそこにルソーの『人間不平等起源論』を訳出されたばかりだった。フランス語の授業を受けたはずであるにもかかわらず、私には、雑談代わりに話されたルソーのことしか記憶に残っていない。今にして思えば、気鋭のルソー研究者のクラスに配属されたという偶然が、私の関心を思想に向けさせることになったのだった。

そのほかの刺激的な授業としては、佐藤俊夫先生の「倫理学」があった。「倫理」というのはメンドウそうな科目名だが、裏ガイダンスの評判がよかったので、聴講した。佐藤先生は和辻哲郎の門下生で、和辻の『人間の学としての倫理学』にしばしば言及されつつ、授業では「習俗」を論じておられた。はじめ「倫理」と「習俗」とは奇妙な取り合わせだと思っていたが、回を重ねるうちに、「習俗」は「倫理」の根幹をなすという先生のお考えが徐々に理解できるようになった。佐藤先生は柳田国男の指導も受けておられたらしいが、方法論は大きく異なっている。

ほか、折原浩先生は「社会学」でマックス・ヴェーバーを集中的に講義しておられ、ヴェーバーの学説と思想の概略を教えてもらった。『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』も、一応は全部読了した。城塚登先生は「社会思想史」を担当しておられた。授業は通史だったけれども、先生の『若きマルクスの思想』は気迫のこもった面白さがあった。毎日冷房のきいた喫茶店に通って読破したことをよく覚えている。肝心の「経済学」だが、内田忠夫先生が

サムエルソンの『経済学』をつかって新古典派総合の経済学を講義しておられた。卒業後は国家公務員になりたいと希望していた私は、自分でも、ケインズを中心にした近代経済学や数学をそれなりに勉強していた。

このように書くと、私はかなり幅広く勉強したように見えるが、履修の幅が広いのは単位を取るためであって、人文科学・社会科学・自然科学の授業科目からまんべんなく履修するように定めた大学の制度によっているだけのことである。年度はじめに履修届けを事務に提出する時点での私は、その科目に対する内発的な関心はあまりなかったし、そもそもどんな授業内容なのかまったく見当がつかなかった。今と違ってシラバスがなかったからだが、シラバスがあったところで、内容は理解できていないだろう。

もし私に独自性があったとすれば、「教養」の理念をかなり強く意識していたこと、その結果として経済学以外の科目もある程度までは本気で勉強していたことであろう。単位さえ取ればそれでいい、とはあまり考えていなかった（出席率の悪い科目で単位だけを望んだことは否定しない）。入学した学部がたまたま教養学部であり——私が教養学部を志願したわけではなく、経済学部に進学するための通過点にすぎなかった——、「教養とは何か」という話を講義のなかでいろいろな先生から聞かされたことによっている。自分の専門以外の学問分野を尊重し、自分でもいろんな分野の本を読むという姿勢は、のちの私にとって、貴重な財産となった。

ところが私の教養時代は、実質的には一年間しかなかった。1年生の終わりに医学部で火がついた学園紛争が、2年生には全学に波及し、教養学部では1968年7月から無期限ストに入った。翌69年1月の安田講堂事件後にストは解除になったが、授業再開後もあまり出席はせず、簡単なレポートを提出しただけで6月に3年生に進級した。（若干補足すれば、レポート提出に応じるか否かは、私たち個人々人にとっては、ストに賛成するか否か以上に大きな踏絵となった。何人かの友人は、レポート提出を拒否して留年する道を選択した。私は一歩後退して二歩前進する道を選んだ。）

このころは、東京大学だけではなく、他大学でも学園紛争が激しかった。市民運動では、ベトナム反戦運動、公害反対運動、成田空港建設反対運動などが盛んになっていた。こうした問題への取り組み方の戦略・戦術をめぐって、大学の中は、学生同士が激しく対立しあっていた。外国関係では、アメリカでのベトナム反戦運動や中国の文化大革命のことなどが、日本でも新聞・テレビなどで大きく報道されていた。日本も世界も激しく揺れ動いていた。

私自身に話題を限定すると、2年生のときは大学の授業は実質的にはないも同然だった。しかし全学的な盛り上がりを見せた紛争だったにもかかわらず、学生運動の活動家はなぜか私の周辺にはいなかった。しかし熱血の学生がいなかったただけのことで、強い関心をもっていた点は同様だった。大学側の対応やストライキの評価などに至るまで、級友や友人・知人のあいだで議論することが多かった。私たちは何をなすべきかという問いは、大学とは何か、学問とは

何か、といった論点とも連動していたから、争点は、大学論や学問論ひいては社会論・歴史論・人間論にも発展した。問題の根本は、日本の経済至上主義や学問至上主義にあるとの結論で落着いていった。

もちろん、このような抽象的な結論では問題の解決に結びつかない。大学内外の集会などに参加しているうちに、私の頭脳は混迷の度を深め、それまでの知的枠組は完全にご破算となった。学生同士の衝突や学生と機動隊との衝突を眼前にして、否応なしに、人間と社会に深い関心をもつようになった。退学といった形で大学という制度的枠組を捨てることはしなかったけれども、心情的には、その枠組から解き放たれてもいた。きれいごとのタテマエ論ではなく、自分の体験、自分の経験に照らして考えることの重要性を身をもって体得することになった。

### 3. 大学時代——経済学部

3年生になると、演習を選ばなければならない。経済学部の教育では演習が決定的に重要だという点は今も昔もかわらない。それほどのためらいもなく、西洋経済史を担当しておられた関口尚志先生の演習を希望した。輪読のテキストは大塚久雄の『近代化の人間的基础』だった。学園紛争に集約される戦後の大学教育の失敗は、日本の近代化の帰結だったから、その近代化過程を評価するうえで、独自の近代化論を展開していた大塚を私なりに総括しておきたい気持ちが強く働いていた。経済学部で「人間」を論じる姿勢にも共鳴できた。卒業論文の題目は「大塚久雄における人間と学問」で、それを書くために、刊行中の『大塚久雄著作集』全10巻（当時は全10巻で完結していた。のちに全13巻となる）を何度も精読した。どの巻のどのページにどんなことが書かれているのかもだいたい記憶していた。4年生の夏休みを使って卒論の最初の原稿を書いたが、自分の考えがなかなか熱さず、提出までに何回か書き直している。

4年生のときのゼミのテキストは、住谷一彦の『マックス・ウェーバー』だった。大塚久雄の流れを汲むヴェーバー像を手際よく整理した著作で、この本を手がかりにして、ヴェーバーの短い翻訳はだいたい読んだし、長いものに取り組んだこともある。宗教社会学関連のものが多かったが、これは、紛争後の閉塞状況の中で、私自身が宗教に強くひかれるようになっていたことによっている。折原先生の「社会学」を聞いていたおかげで、ある程度の予備知識をもっていたことはありがたかった。あわせて主要なヴェーバー研究も何冊かひもといた。

こうして私の経済学部時代は、大半を大塚久雄やマックス・ヴェーバーを読むことに費やされ、この学派の立場にたった人間の見方、社会の見方、歴史の見方などを吸収することに情熱を傾けた。それと同時に、経済学部の学生なら誰でもやっている経済学の勉強にはあまり熱心でなくなっていた。単位は取らなければならないから、宇野学派の著作なども含めてそれなりに勉強したけれども、近代経済学やマルクス経済学は経済至上主義の発想に支えられた学問であるように見え、その点では日本の近代化過程の双子の兄弟にすぎなかった。

#### 4. 大学院時代

経済学部を卒業するときは、官庁や企業に就職する意欲はほとんどなくなっていた。そのことは、私だけではなく、同期の学生たちに共通していた。紛争世代の私たちにとって、就職することは長く伸ばした髪を短く切ることであり、それは自分の魂を売ることにも等しかった。日本経済はまだ高度成長期にあったから就職先には困らなかったけれども、悲痛な思いを抱いて卒業した人は多かった。逆説めいてはいるが、大学解体を求めた世代であったにもかかわらず、大学院への進学を希望した学生の割合は、例年よりも高かった。

幸いにして、1971年に私は大学院の入学試験に合格できた。「幸いにして」という表現を使ったのは、例年をはるかに上回る志願者数だったからである。しかし、合格者数も例年以上に多かった。

入学試験は大塚久雄論で審査を受けたが、大学院でこのテーマを続けるつもりはなかった。もちろん、近代経済学にせよマルクス経済学にせよ、主流派の経済学をやるつもりもなかった。何を研究したらいいのかかなり悩んだが、私は「柳田国男」をテーマにしようと決心した。

当時の心境は、いまでも十分には客観化できていない。紛争期の私は、極度に原理主義的な人間主義の傾向を帯びていた。しかし政治の季節が終わったことで、原理主義的傾向からの反動が生じ、民俗や自然という非原理主義的な世界に心ひかれるようになっていた。そこには原理主義的人間主義が意図的に否定してきた“生身の人間”“本物の人生”が存在しているような気がしたのである。こうした心境は私だけではなく、紛争後の大学生に共通していたと思う。とくに卒業記念に旅行した沖縄での見聞は、私に大きなカルチャー・ショックを与えた。沖縄特有の文化に「人間」を感じ、人間を中心に据えた学問をしたいという欲求を強くもつようになった。

こうして東京大学大学院経済学研究科で「柳田国男」をテーマにすることにしたのだが、いま振り返れば、大胆きわまる選択であったことは否めない。しかし当時の私は、「経済学」と「柳田国男」というアンバランスに違和を感じることはほとんどなかった。なぜ文学の大学院に進まなかったのかと質問する人もいるが、そのような選択肢は考えたこともなかった。

なぜなら、もともと関口先生の演習ではヴェーバーの宗教社会学の文献を読んでいたのだし、そのような文献を選んだ先生は、既存の経済学がもつ経済主義を批判するという意図を込めておられた。社会現象を経済学の論理のみで分析しようとする立場には批判的で、「経済学的な、あまりに経済学的な」ということばをよく口にしておられた。柳田も若いときには農業政策を論じており、そのあとで宗教意識を研究する方向にすすんでいった。その点で柳田とヴェーバーの学問的軌跡には共通しあうものがあった。

最大の相違点は、経済学の学問体系の中で、ヴェーバーが市民権をある程度は有しているのに対して、柳田はまったくないという点だった。しかし学問というのはもともと未開拓の分野

を開拓するものであるから、私はほとんど意に介していなかった。紛争後の閉塞の時代はアナキーな時代でもあった。幸いにして経済学の大学院では指導教官制が廃止されていた。そのおかげで、指導教官の人選に悩まされることなく、つまり指導教官が得られないとか、指導教官の指導に従わなければならないとかに悩まされることなく、自分の問題意識を存分に追求することができた。それどころか、指導教官制の枠がなくなっていたことで、大学院での私は、関口先生だけではなく、多くの先生方から学問的指導を頂戴することができた。

経済思想史では、杉原四郎先生から手紙を介して指導を受けた。ご多忙のはずなのに、いろいろな情報を教えてくださったり、励ましてくださったりして、独学に近い状態で研究していた私には、じつにありがたかった。先生は“史料をして語らしむ”学風で、これが歴史学の本道であることが徐々にわかってきた。後述する『日本農業新聞雑誌所蔵機関目録』は、先生のご指導に感謝したいという気持ちから、先生の退職記念として発行したものである。この目録づくりは、先生の学風を私なりに継承した仕事だった。

民俗学については、それまで勉強したこともなかった分野だった。基礎から勉強したほうがよいと思い、東京教育大学の授業に出ることにした。竹田旦先生の学部の授業に盗聴することにしたが、他大学のことなので、竹田先生に事情をお話して盗聴を許可してくれるように願い出た。先生は快く了承してくださり、それどころか、大学院の授業に出たほうがよいと薦めてくださった（「盗聴」ということばは今は死語だが、紛争後の一時期、単位取得と関係なく、聞きたい授業を正規の手続きなしに聴講するのが流行していた。もちろん単位として認定されないが、そのようなことに関心をもつ人はほとんどいなかった）。

東京教育大学で大学院の授業に出席したり史学方法論の資料室に出入りしたりしているうちに、助手の宮田登先生や何人かの大学院生の面識を得るようになった。その数年後に宮田先生が東大の文学部へ非常勤講師として教えに来られ、院生の私は三年ほど続けて盗聴した。あるとき「藤井君が毎年聞きに来ているから毎年授業内容を変えなきゃいけない」と言われ、意外なお言葉に驚いたことがある。自分で授業をやるようになると、先生のお言葉の意味がよく理解できた。ちょうど東京教育大学の教員が中心になった『日本民俗事典』（1972年）が発行されたばかりで、外出するときの私はいつもこの『事典』を持ち歩いていた。電車の中で全ページを暗記し、民俗学の基礎を修得するためだった。

そして、大学院時代に得たもっとも大きな“収穫”は、大田堯先生の存在を知り、先生から直接指導を受けることができたことだった。先生が都留文科大学の学長として転出なさるまで、修士課程2年から博士課程2年終了時まで、東京大学大学院教育学研究科での授業を3年間つづけて出席した。最初の年は他研究科聴講の扱い、その後は盗聴だった。テキストは柳田国男が書いた教育関係の論文だったが、柳田その人の研究ではなく、柳田の思想を現代の教育問題にどのように生かすか、という立場での読み方だった。大田先生のお人柄と学問に接し、学問上の研究成果はもちろんのこと、学問する人間としての基本姿勢も教えていただいた。対

面指導を受けた先生としてはもっとも強い影響を受けた先生であり、先生がお書きになった著作はいまも熟読玩味して、先生の学問と思想を摂取することに努めている。

振り返ってみると、私の大学院時代は盗聴した講義がずいぶん多い。柳田国男を深く理解できるようにする必要があったからだが、柳田を研究することじたいが自分自身の存在を確かめるためだったから、研究のためなのか自分のためなのか、境界は判然としない。

吉田禎吾先生の「民族学」は2年つづけて盗聴し、機能主義や構造主義の方法論を理解することにつとめた。住谷一彦先生の特殊講義「共同体論」や、外間守善先生の特殊講義「沖縄文学論」は1年間だけだったと思う。あるとき外間先生のお誘いで受講生がこぞって沖縄料理店へ行く機会があった。そのときにはじめてお互いに自己紹介しあったが、驚くべきことに約半数が盗聴生だった。学園紛争の過程で、既存の大学制度は大きく動揺していた。“学問はみずから求める”、そういうことが当然視された時代だった。

断るまでもなく、大学院時代の私は盗聴だけをやっていたわけではない。大学院を修了するために必要な単位は取らなければならないから、経済学研究科や他研究科の授業には出席していた。盗聴した分も単位に換算すれば、私は非常に多くの単位をとっていることになるはずである。苦にならなかったのは、盗聴科目のほうが充実感があったからだろう。単位取得の有無を問わなければ、私は、東京大学では経済学研究科、教育学研究科、文学研究科、法学研究科、そして東京教育大学の文学研究科に出入りした。

昨今はやりのことばを使えば、大学院時代の私は、意図せずして、「学際的研究」を実践したことになる。教養学部時代も異分野の勉強はしたが、雑知識の寄せ集めにすぎなかった。大学院ではその時代からバージョンアップして、私なりの柳田国男像を構築するという明確な研究テーマをもち、ヴェーバーの流れをくむ歴史理論や方法論などをもっていた。それを核にして異分野を学び、摂取することに努めた。柳田国男についての論文を書くという具体的な目的のために、異分野でも使いそうな資料や理論は何でもおおいに使った。

ところで肝心の論文だが、大学院生だから、論文を書くことが当面の目標となる。ただ私の院生時代の慣行は、たぶん今と異なっていると思う。私の院生時代は、博士課程3年目で博士論文を提出する人はほとんどいなかった。大学院の終わり方は、学位を取得して「修了」するのではなく、大学や研究機関に就職するとともに“自然に”大学院と縁が切れ、就職後に博士論文を提出して論文博士になるという形が多数だったと思う。大学院生のノルマは、博士論文を書くのではなく、学会誌用の論文を書くことだった。私の時代の私の分野では、全国学会誌に2本発表することが就職するさいの最低条件になっていた。つまり実質的に、修士・博士の5年間で2本の学会論文を発表すればよいのであった。

そんなことから、私の大学院時代は、時間的には今の大学院生よりもゆったりしていたと思う。さかんに盗聴ができたのも、博士論文はライフワークとして書くべきものだと信じこんでいたおかげである。私は『定本 柳田国男集』に収められている著作を、郷土研究（民俗学）

の部分も含めて、ノートを取りながら紙めるように読んでいった。充実した毎日だった。

とはいえ、私の頭脳はきわめて逼迫していた。何といても柳田は難解で手ごわい。教養と  
うか基礎的な学識というか、彼と我のあいだでは格差が大きすぎる。随筆風の文体も私を苦  
しめた。意味不明の文章を読むのはヴェーバーで慣れているけれども、柳田のばあいはあとで  
論文を書かなければならない。細部まで十分に理解するのでなければ、論文が書けるはずはな  
い。相当のプレッシャーだった。

ただ一面では、妙に楽観的なところもあった。柳田その人は、若いときに経済学を勉強し、  
やがて不満を感じ、そこから離れて郷土研究という学問を構築していった人だったから、その  
過程をすなおに追跡して論理化すれば、柳田国男を選んだ私の意図は実現するはずだった。い  
かに素直になるか、どのくらい虚心に読めるか、それが決め手になるだろうとは考えていた。  
しかし他人の思想に対して虚心になり、素直に言い分を聞くというのは、かなりむずかしい。  
が、何となく頑張れそうな気がしていた。ある意味では、この「何となく」の予感だけで頑張っ  
てきたような気がする。

柳田国男関連の著作を読みすすめていくうちに、『定本 柳田国男集』に収録されていない  
柳田の農政関係の論文や関連資料がかなり集まったので、ご子息——ご子息といっても、私の  
父と同世代である——の柳田為正氏に出版したい旨の希望を述べたところ、法政大学出版局を  
紹介してくださった。それが『柳田国男 農政論集』で、1975年、私が博士課程2年に在学中  
のことであった。

この本に取めた資料を収集するために、1900年前後から1910年前後の農業関係の雑誌は、目  
次だけだが、ほとんどすべてに目をとおした。東京大学のばあい、この時期の雑誌は経済学部  
や農学部、明治文庫の図書館だけではなく、安田講堂の中にある広い一室にも置かれていた。  
安田講堂事件の記憶はまだ生々しく、その建物の中で黙々と調べものをするのは複雑な気持ち  
だった。東京大学は関東大震災のときに被災しているという話だったので、国会図書館はもち  
ろん、早稲田大学や慶応義塾大学、東京農業大学など、歴史の古そうな大学の図書館はすべて  
調べあげた。古くはないけれども、農業総合研究所や農業技術研究所の図書館にもおもむいた。  
すべての雑誌に目をとおすといっても、今の雑誌のようにページ数が多くはないから、書架に  
ズラッと並んでいても圧迫感はなかった。むしろ砂金を見つける喜びのほうが先行していて、  
達成感があった。

『柳田国男 農政論集』の出版は、こちらが驚くほど大きな反響があった。何よりもまず、『定  
本 柳田国男集』は柳田の全集ではないという周知の事実をあらためて認識させた。第2に、  
柳田は農政関係の本格的な論稿をかなり多く書いていたということを研究者に認識させた。こ  
のことは、柳田を理解するには、たとえ郷土研究の著作であっても、経済学の知識が不可欠  
であることを意味する。

そして第3に、千葉徳爾先生からお電話をいただいた。“自分の手元に柳田先生からお預か



りしたままの原稿がある。藤井が出版してくれないか”という内容だった。お会いして現物を見せていただくと、手書きなのでよくは読めなかったが、たしかに私の未見の原稿である。先生によれば、柳田国男は、講演のとき、ほぼ完成原稿に近い講演原稿をいつも用意していたということだった。(しかし講演のときには、その原稿をほとんど見ないで話すということも付け加えておられた。)この原稿は、そのまま活字化したとしても、論文として十分に内容が理解できるほどの高い完成度をもっていた。後日、柳田為正・千葉徳爾・藤井編『柳田国男 談話稿』(1987年)という書名で、同じ法政大学出版局から発行してもらった。

論文のほうは、「柳田農政学における産業組合の位置」を『思想』1976年5月に、「日露戦後経営期における新学問の胎動」を社会思想史学会の『社会思想史研究』第3号(1979年)に掲載してもらうことができた。とくに『思想』論文は東畑精一氏から高い評価をいただいた。このとき以後、東畑氏が柳田国男を論じるさいには、必ずといってよいほど私の名前に言及してくださるようになった。今にいたるまで東畑氏とはまったく何の面識もなく、氏は、私の仕事のみを見て評価して下さったのである。理解者の少ない私にとって、これは大きな喜びであり、励ましであった。

## 5. 「日本経済思想史研究会」と「柳田国男の会」

1980年に私は新潟大学経済学部勤務することとなった。新潟大学に勤めるようになると、母校との縁は徐々に薄くなっていった。それに反比例して、新潟大学の人文社会科学系の教員と親しくなり、種々の知的な刺激を受けるようになった。大学院時代の私の関心は文学系に傾斜していたが、新潟では、法学畑の同僚とも談笑する機会が多くなった。多様な分野の専門家が狭い範囲に一定数存在する、という中規模総合大学の利点が作用するようになった。

とはいえ、地方都市の欠点として、私とよく似た専門の人は私一人しかいない。たまたま母校の下級生に宮島英昭さんがいることを学会誌の論文で知り、氏と相談して、日本経済思想史の研究会を立ち上げることにした。宮島さんの恩師は逆井孝仁先生で、逆井先生から小室正紀さんや川口浩さんらを紹介してもらった。先生の教え子の篠崎英二さんも参加した。杉原先生からは、故藤原昭夫先生を紹介していただいた。こうしてわずか7名で、「日本経済思想史研究会」が発足した。1983年のことである。毎月のように逆井先生の研究室で研究会が開かれ、各自の報告をもとにして活発な議論が展開された。

『日本の経済思想四百年』(1990年)は、この研究会の創立期の協同作業の産物である。「日本経済思想史」という分野は、経済史と経済思想史にまたがる学際的な分野だともいえるが、ニッチ(隙間)的な分野でもある。新興の分野であるだけに、「日本経済思想史」という科目を開設している大学はごく例外的でしかない。おのずから日本経済思想史関係の入門的な図書は少なく、読書界や学界の理解は乏しかった。そこで日本経済評論社の理解を得て、日本経済思想史研究会の事業として『日本の経済思想四百年』を作成したのである。時間をかけてつくっ

ただけに、予想を超えて版を重ねることができた。

その勢いを借り、1991年から年刊の「会報」を、10年後の2001年には待望の研究誌『日本経済思想史研究』（日本経済評論社）を年刊で発行できるようになった。会員数は百人を超えるようになった。自前のホームページも持っている。関係者の努力の積み重ねのおかげで、「日本経済思想史」という分野は着実に市民権を得つつある。たとえば経済学史学会は、日本経済思想史のシンポジウムを何回か開催してくれた。また経済学史学会編の『経済思想史辞典』は、私を編集委員に加え、日本経済思想史関連の項目が多いことを同書の特徴のひとつとしてくれた。日本経済思想史研究会の創立に立ち会った者の一人として、感無量である。

ところでもう一つ、新潟大学に勤めるようになったころの私にとって残念だったのは、柳田国男が学問研究の対象としてなかなか認知されないことだった。後述するように、私はなるべく学会誌に論文を發表するように努めていた。しかしそれは私の論文が学術論文であることを認定するだけのことであって、柳田国男その人が学問研究の対象として定着していることを意味するわけではない。

そこで考えついたのが、学会の大会でシンポジウムにとりあげてもらうことだった。幸いにして社会思想史学会が了承してくれ、慶応義塾大学を会場にした第19回大会(1994年10月)で、「柳田国男の現代的意義」と題するシンポジウムを実施することができた。パネラーは川田稔、福井直秀、福田アジオ、藤井の4名で、福田さんは非会員だが学会の許可を得て参加してもらった。お三方とも、日ごろから何かと情報交換・意見交換する親しい間がらである。政治学、教育学、民俗学、経済学という複数の学問分野にまたがる柳田研究者を集めた、社会思想史学会ならではの顔ぶれとなった。このシンポジウムの記録は『社会思想史研究』第19号(1995年)に収録されている。この号は柳田国男の肖像写真が表紙を飾っており、非欧米系で表紙になった最初の思想家である点で、私にとっては意義深い。同じ年の夏にパネラー3人が富山市に集まって合宿形式の打合せ会を開いたが、楽しく充実した一泊二日だった。

じつはこのシンポジウムを提案するまえから、福井さんとお話するなかで、柳田研究者や柳田に関心をもつ人を集めた全国規模の研究会をつくりたいという気持ちが強くなっていった。シンポジウムで4人が一同に会したのを機に、「柳田国男の会」の結成にむけて行動を起こすことを決めた。各自が交友する柳田関係者に呼びかけ、1995年に福井さんの勤務先である京都外国語大学を会場にして「柳田国男の会」の創立大会を開いた。このときの様子は『朝日新聞』1995年8月2日の記事で紹介されているから、ご記憶の方もいると思う。

「柳田国男の会」は、人文社会科学系の多くの分野にまたがる専門家・愛読者を結集した研究会となった。それだけに、自分とは異なる知的枠組が存在することを知る場としては、これ以上のものはないだろうと思う。できるだけ開かれた組織、できるだけ柔軟な組織にしたいという趣旨から、会長は置かず会則も設けず、入退会は自由、会費は徴収しない、事務局担当者が融通無碍に会を運営する、こととした。その後『朝日新聞』が、「柳田国男の会」のことを

紹介してくれた別の記事で、“会員数が増え、事務局担当者は毎年交代するのだから、会則や会費なしで運営するのは事務局の負担が大きいのではないか”と指摘してくれたこともあり、2002年の第8回大会で、明文化した「運営方針」をつくった。私は原案づくりには参加していないが、会長を置く規定がないところを見ると、会長のいない会にすることの意味は、他の会員にも理解されているらしい。

この会は、年に一度の大会を開くのが活動の過半を占める。大会後に報告集をつくるが、すでに7冊となった。報告集といっても、報告者に提出してもらったワープロ原稿を事務局が会員の数だけコピーしてホッチキス止めするという簡単なものである。会員外の人には入手しにくく、‘著名人’が多く執筆していることもあって、マボロシ系の報告集になっているらしい。会員数が増えるとともに、この報告集をグレードアップして研究誌に格上げすべきだという意見が強くなり、2003年4月から『柳田国男研究論集』を岩田書院から年刊で発行してもらうこととした。

また「柳田国男の会」は自前のホームページを持っている。管理人の中村治人さんが奮闘してくれているおかげで、すごく評判がいい。「柳田国男」で検索すると、「柳田国男の会」が最初に出てくる。検索する人が多いからだそうだ。

こうして私は、「日本経済思想史研究会」と「柳田国男の会」の2つを自分の研究活動の場とするようになった。前者は「日本経済思想史」という狭い専門分野を拠点にして多様な思想家を研究する会であり、後者は「柳田国男」という一人の思想家を多様な専門分野からアプローチする会となっている。どちらの研究会も明確な個性があって面白い。

それにつけても、しみじみ感じることは、「協力」という文字の意味である。ある漢和辞典には、「協」とは3人が力を合わせて土地を耕すこと、と記されている。研究会は2つとも、同志と呼べる友人が集まり、互いが「力」をあわせて立ち上げたものであった。私はその一人にすぎない。

## 6. 『柳田国男 経世済民の学』をまとめる

時計の針をだいぶん逆転させるが、就職後の私はしばらくスランプが続いた。柳田国男のついでに続編が書けなくなったのである。原因のひとつは私の勉強不足にあった。『思想』論文のときには『社会思想史研究』論文の構想が頭の中にできていたけれども、『社会思想史研究』論文のときは、そのつぎの論文の構想がないままに執筆していた。なぜ続きの論文が書けないか。理由は、柳田の郷土研究の部分についての私の勉強が十分に消化できていなかったからだった。異分野の勉強はそれなりにやっていたつもりだが、自分のことばにして使いこなすまでには熟していなかった。借り物の理論や概念で柳田を読んでも、借り物の柳田論にしかならない。

しかしそのうち、スランプをもっと積極的に活用したいという気持ちが生じてきた。『柳田国男 農政論集』は評判がよかったけれども、それだけに、私の思いは複雑となった。それは、

私が論文で提示する仮説よりも、柳田自身の論文のほうがはるかに価値が高い、という当たり前の事実を身をもって知ることになったからである。それならばそれで、史料を発掘する仕事に専念してみようと考えた。当時の私は、杉原四郎先生が声をかけてくださって、日本の経済雑誌を研究するプロジェクトに参加していた。私は農業雑誌を担当したが、どこの図書館にどんな雑誌があるかは、だいたい承知していた。それをすべて網羅した雑誌目録をつくることにしたのである。これが前述の『日本農業新聞雑誌所蔵機関目録』（日本経済評論社、1986年）である。

この目録のユニークな点は、その新聞なり雑誌なりの所蔵場所を調べられるようにした点にある。一般に、目録は、文献名は記載してあるが所蔵する図書館を記していない。そのために、その文献を実見しようとする、所蔵場所を求めてさらに調査に手間をかけなければならない。その労力と時間のムダを省くために、単なる目録ではなく、“所蔵機関”目録とすることを考えついたのである。

この仕事はかなりの部分まで肉体労働であった。各地の図書館をまわり、書庫に入って埃のかぶった現物を確認するのは、三Kそのものだった。私の体はクタクタに疲れたが、期待したように、肉体労働に従事したおかげで私の頭は空白になり、白紙の状態で柳田国男を読むことができるようになった。前回は農政学から始めたのに対して、今回は幼少年期の分析からはじめた。分析の終期だが、柳田の思想は戦前期に完成されているとの自説から、ファシズム期の柳田で終わらせることにした。

柳田国男の著作を読み直してみると、今度は彼の言いたいことが素直に伝わってきた。構想も短時間でまとまり、執筆はわりと順調だった。しかし労力と時間は十分にかけたつもりである。1988年発表の「布川時代——基礎的経験としての貧困」から1995年発表の「ファシズム下の教育政策と社会改革——“常民”の創出」まで、執筆開始から数えて足掛け10年を要する大仕事となった。

もっとも、10年という数字は割引する必要がある。柳田論を完成させるまでのあいだに、テッサ・モーリス＝鈴木『日本の経済思想』の翻訳や、恩師である関口尚志先生の還暦記念論文集の編集などをやっていて、道草を食っていたからである。思想の研究には、冷静さや円熟も求められる。そのため“早書き”はできるだけ避けるべきだという気持ちが強く働いていた。意図的にほどよく道草して、柳田国男研究に熱中しすぎないように気をつけていた。

前述のとおり、発表する雑誌にも気を配った。柳田論にはエッセイ的なもの、雑文的なものが多い。そうした柳田論と一線を画し、学術論文であることを示すために、全国規模の学会誌に載せることを基本とした。学会誌であれば、学術論文としての認知が得られると考えてのことである。多方面で業績を残した人だから、その業績に合わせた学会誌に発表するよう心がけた。その結果、初出論文の発表誌は多くの専門分野にまたがることになり、発表した学会誌は種類が多くなった。

ただ学会誌の難点として、投稿から掲載までに時間がかかる。書いた以上は、はやく発表したい。発表に要する時間を短縮させるため、発表は学会報告で代替し、博士論文には報告の原稿を収録するというやり方をとったこともあった。

完成までに長い年月を要した博士論文だったが、頭のなかに論文の構想が十分に熟していたので、かなり密度の濃い論理性・体系性をもつ論文に仕上がった（余談になるが、柳田研究に論理性や体系性をもたせることにはかなりこだわっていた。論理性や体系性を重視していた宇野弘藏の経済学が好きで、「宇野理論」に自分なりに対抗するつもりだったことによっている）。既発表の個別論文をあわせて『日本における社会政策学派の一展開——柳田国男 経世済民の学——』としてまとめ、母校に学位申請した。平行して出版の作業をすすめ、『柳田国男 経世済民の学——経済・倫理・教育——』という題で名古屋大学出版会に発行してもらった。学位を取得し、著書を出版したのは1995年のことである。大学院に入学したのが1971年だったから、四半世紀年を要した大仕事になった。

博士論文の題名と著書の書名とは違うものにした。一方は学界向け、他方は出版界向けなので、使いわけただけのことである。中身は同一である。著書の表紙の装丁は、書家の石川九楊氏が担当してくれた。絵には和田英作の名作「渡頭の夕暮」をフルカラーで印刷、書名の文字は石川氏の手書きという超豪華な表紙となった。私の“お宝”である。ちなみに石川氏は、2002年の毎日出版文化賞を受賞された。心からお喜びしたい。

ところで、私の柳田国男研究の内容だが、著書の副題が示すように、「経済」「倫理」「教育」の分野にまたがる内容となっている。「倫理」の部分は佐藤俊夫や大塚久雄の学問が、「教育」の部分は大田堯の学問が色濃く投影されている。博士論文の題名にあるとおり、この三者を「日本における社会政策学派の一展開」という観点で統一的に整理した研究だった。

柳田国男の学問体系は、経済思想史の観点からみると、日本で1900年代から1910年代にかけて主流派となった社会政策学派の経済学として位置づけられる。柳田の郷土研究は、社会政策学者である柳田が彼独自の政策観にもとづいて社会政策学を発展させたものだった。柳田が郷土研究と呼んだ学問を民俗学と解釈するのは誤解で（柳田自身も民俗学という表現はほとんど使っていない）、本質は「倫理学」だという問題提起も含んでいる。

つまり柳田の学問の核心は「経世済民」という点にあり、日本の経済問題を解決するためには「経済」の局面だけでは不十分で、「倫理」や「教育」の面も統合した政策が必要と考えていた、と私は理解した。この理解にもとづいて、「経済」「倫理」「教育」にまたがる広い異分野を、「日本経済思想史」という狭い専門分野で束ねたのである。経済学の研究に「倫理」や「教育」を構造化して盛り込んだところが、私の初心を反映している。

幸いにして『柳田国男 経世済民の学』は多くの書評に恵まれた。二つも書評を書いてくれた人もいる。外国の研究誌に掲載された書評もあった。ページ数の多い本であったのに、ていねいに読んでくださり、本書の意義や今後の課題を示してくれた方々には本当に感謝してい

る。意外なことに、日経・経済図書文化賞にもノミネートされ、最終選考まで残った。賞は逃したが、もともとが経済学批判を意図して書いた著作だったから、経済学関係の賞の候補になるなどとは考えもしなかった。審査委員長の今井賢一氏が『日本経済新聞』（1996年11月3日）にコメントを寄せてくださっている。私の意図をよく汲んでくださっていて、うれしかった。今井氏のコメントの全文を紹介する。

藤井隆至「柳田国男 経世済民の学」は、経済思想史の観点から、柳田国男の業績の現代的意義を地域主義の理念、人々の内面的な価値観などに着目しつつ新たに掘り起こそうという仕事である。結論としては、本書の大半を占める柳田国男論は日経賞の対象から外れる、という平凡なところに落ち着いたが、本書が候補作になるということ自体、経済学や経営学が、現代さまざまな意味で問い直されていることを如実に示すものであろう。

かつて「一歩後退」した私であったけれども、今井氏のコメントを得たおかげで、25年かけて「二歩前進」できたのかも知れない、という気になっている。私にとっては、これまでの労苦をあがなってくれる貴重なコメントであった。

しかし、それとともに、この25年間で時代も私も大きく変化した。私自身は、その後、経済学部長（1998～2000）、現代社会文化研究科長（2001～）というポストに就き、「柳田国男オタク」から「学内行政オタク」に変身した。学内行政に専念することにより、柳田研究によって固くなった頭をカラッポにしたいと願っている。